《留学生から》

福岡訪問記

金　　誠　培（化学専攻　博士課程１年　韓国）

私が初めに日本と出会ったことは、今から約３年前頃だった。そのとき、福岡の福岡大学で開催されたアジア分析化学会 第四次 学術会議に参加することになってからである。私の教授と私、そして、他の二人の同僚の参加が決まった。そういう訳で、日本語も全然知らない四人の外国人の日本探険が始まった。ソウルの金浦国際空港で朝10時ごろ、JAL 航空に乗った。JAL 航空機ではすべての案内放送が日本語で行われたので、ある程度の不安と緊張は仕方がなかったが、外国人向けの入国審査カードに関しても日本語で案内するのを見た途端、“なんか先の旅行がスムーズにはできないだろう”と思った。約１時間10分ぐらいの飛行の後、我らは福岡空港に到着。飛行機のなかから見えた小さい都市がだんだん大きくなってきた。私の心には“ここが日本という国か”と思った。空港には学会からの案内人がピケットを持って案内してくれたが、それも地下鉄までだけ、もう一度、不安感が我らをくるめてしまった。私の先生は英語がうまくて英語の本も書くほどだったが、その優れた実力がここでは地下鉄に乗るくらいにも役に立たなかった。先生は“しょうがないじゃん、降りる駅の名前も読めないから、乗った駅から降りるはずの駅まで、駅の数を数えて！”とおっしゃった。それが空港から福岡市内の予約したホテルの前の駅まで長い間、回りの人にも気にせず、一生懸命、電車が止まった度に駅の数を数えた理由だった。身ぶり手振りで、ようやく西鉄グランドホテルに到着。でも、今からだ。明日から重要な学会の発表があったり、忙しい日程の始まりだった。明日からもう一度、悪夢のような場所探しが始まるんだ。とにかく、日本の朝は曇りの天気とともに始まった。“急がなくちゃ、学会のオプニング発表会に遅れるんだって”、だれか催促する人がいった。今度はホテルのフロントの人にちゃんと聞いて見た。でも、あまり知らないのは変わらず。一応、福岡大学の看板があったバスに乗って、回りの人たちを観察してみた。それから、バスの切符は乗るとき、ドアの前でとることがわかった。いよいよ、福大の正門、学生たちで賑やかだった。何かティッシュみたいな物を配っている女性も見えた。われらは学会が用事だったので、とにかく、学校内に足を踏んだ。“ただなのに何でもらわないの”と先生がおっしゃった。“そうだ。ただなのに。。”僕はなんか、もったない気がして、戻っていって彼女にまずい英語で、頼んで見た。“俺にも一本ちょうだい。”“・・・”

返事がなかった。そして彼女の困った表情。“エー、何で、他の人にはよく配っていたのに俺にはなんで。。”と思ったが、とにかく、私はどうしてもその一本をもらいたがったので、“顔の表情があやしいな”と思ったが、結局、一本をもらってしまった。でも、あとでわかったが、それは男性は使えないものだった。

学会のオプニング発表会が終わったあと、私の先生は他の韓国人の教授たちと一緒にどこか行きたかったので、“どこか行って昼御飯食べて”といいながら、他の教授たちが見ている前で、我らに１万円札を出してくれた。その途端、私は“やー やっぱり、先生は天才だなー”と思った。なぜかというと大学構内には一食で最高価が、ただ、600円しかならない。結局、その残りのお金、即ち、食べて、残ったそのお金の大部は先生に戻ってしまった。先生は他の教授たちが見ている前で、一見、名目的に、そして、実利的にもまかせない有利な商売をしたのだ。

我ら学生みんなが福岡大学の教授食堂で昼御飯を食べるようにしたけど、それも、なかなか難しかった。お料理の名前を読めなかったので、ジェスチャーで注文はしたが、出たお料理の知らせをわかるわけがなかったし、その上、たくさん、食堂が込んでいた。注文してから、何十分も過ごしたと思った。そして、ある女給が２人分の料理を持って、声上げて、いじらしくお客さんを呼ぶ声が聞こえた。それで、十分食堂の中で知らせられたのに注文したお客は出なかったのだ。私たちはそれを始めから観察してから、その料理が僕らの料理に間違いないと確信ができた。そういうわけで、待たせられたあげく、昼御飯を食べられたのだ。

その午後、ポスター発表時間に運命の女性と出会った。発表場を迷っていた私に素晴らしいカタチの女性が私と同じ研究テーマで発表しているのがわかった。そして、他の待っている人のつらい目にもかかわらず、１時間くらい、くっついて質問して、最後に、ｅ-メールを交換した。その学会は学会が開いている一週間の間、毎晩、宴会があったので、その夕方の宴会でもう一回出会う機会があった。その宴会は、あるホテルのメイン・ホールで皆がタキシード着て参加する会だった。その宴会の間も、ずっと一緒にいたのだ。その後で約２年くらいｅ-メールで連絡したが、今から、約１年ごろ前、結婚するんだというｅ-メールを最後に連絡が切れた。きっと、どこかに幸せに住んでいるでしょう。

あまりにも、言葉ができなかったので、いつも不安な気持と模倣とで日々を送っていた我らも勇気を出したことがあった。それは温泉旅行。その学会に参加した韓国

人の先生たちと、別府温泉に行くように決意したのだ。今、考えてみても、地下鉄も乗れないくせに、なぜ温泉旅行を決意したのかおかしい。結論として言えば、どんなに韓国では有名な大学の教授たちで、全部、博士で英語がうまくても、日本で日本語ができない場合には、どんなにつまらない旅行になってしまうかをその時、初めてわかった。

その後の日は土曜日で、韓国に帰る日だった。我らは朝早く起きて、準備して、ホテル・ロビーに集まり、タクシーで空港まで行った。その時、我らが泊ったホテルは福岡で一級ホテルで、宿泊料もきっと高かったと思う。それは、先生がホテル・ロビーで計算表をご覧になって、開かれたおくちを暫く閉められないことを見てわかった。実は、先生がそのホテルを予約するときも日本語ができなくて、失策でその一級ホテルを予約なさったのだ。とにかく、私にはよい経験だと思った。空港で妹にあげるお土産を買っておいた。お金が惜しくて、開かれたおくちを閉められなかった先生の表情にもかかわらず、私は同僚たちとおもしろかった今度の日本旅行について話の花をさかせたのを今でも思い出す。

福岡にて韓国の仲間と（右端が著者）